

公開講座活動報告

法人・団体名 宮崎県母性衛生学会

テーマ 慈恵病院 10 年間の経験～熊本地震、こうのとりのゆりかご、こども食堂～

講師 慈恵病院 副院長 蓮田 健 先生

開催年月日 平成 29 年 10 月 28 日 (土) 16 時 00 分～17 時 10 分

会場 宮崎県立看護大学 高木講堂

講演概要 文字数は 1200 字程度で、適宜写真等を 1, 2 枚挿入してください。
内容は、地震とゆりかご、子ども食堂の内容を主に写真で紹介された。

2016 年 4 月の熊本地震は、市民にとって青天の霹靂で全壊が 8000、半壊が 28000 で特に倒壊が激しかった益城の写真を見せながら説明された。2 回の震度 7 の地震は、非常に怖く子供だけでなく大人もパニック状態となっていた。慈恵病院は、地下水を水道水などに使用していたため、地震後は水が使えず非常に困り、病院職員が JR で福岡までフィルタの買い出しに行き、院内の飲用水を確保するなど皆で協力していたことや倒壊が激しかった熊本市民病院へ患者を迎えに行き連携を図った。午前 1 時頃の本震の時、病院では分娩後の縫合途中であり、慌てて病院の正面玄関自動ドアに救急車をつけ妊婦さんを運び、後方ドアを開け処置灯のもと、縫合を行うなど職員全員で協力した。地震後数日は、備蓄食材で病院食をまかなっていたが不足し、150～200 人分の食材を調達するために、病院職員が、久留米までクーラーボックスを抱え買い出しに通ったが追いつかず入院患者さんに非常に辛い思いをさせた。行政や報道に協力を要請するも優先順位があり、すぐには対応してもらえず困っていた時、職員のアイデアで Facebook での呼びかけを行った。投稿の翌日には支援物資が届き、24 時間でペットボトル 2000 本以上やお米 2.5 トンなど大量の援助を受け、非常に助かり感動したと話された。熊本震災を通して備えの大切さを学び、日頃から心がけることが大切だと話された。次に、虐待の事例をあげ、「こうのとりのゆりかご」の活動を話された。世の中の虐待のうち表面化してくるのは一部で、虐待されても無事であった子供たちは取り上げられず実際は年間約 100 人の赤ちゃんが虐待で殺されており、世の中には要らない赤ちゃんや居てもらっては困る赤ちゃんがいるのは否定できないと感じたと話された。ゆりかごを利用した理由として、経済的負担が多いことが分かっているが、育

てられない赤ちゃんは対応されるが、ゆりかごを利用する側のサポート体制は少ないのが現状である。ゆりかごの入り口には、手紙やインターホンがあり、赤ちゃんを預ける前に相談できる環境づくりや、24時間体制で管理・メンテナンスを厳重に行っている。「このとりのゆりかご」ができる10年前は、世の中の子捨てが増えるのではないかと心配されたが、預け入れが一番多い時で25人であった。10年間にゆりかごに預けられた赤ちゃんは130人で、児童相談所の管理下に入り施設、里親や親が引きとって生活するケースなど様々だが、養子縁組が増えている。蓮田氏も現在、里親研修をしており子どもたちの愛着形成の問題を痛感され、24時間、365日のフリーダイヤルで電話相談を行っている。1人親世帯の50%が相対的貧困で、貧困の子は一日一食、学校での給食のみと言われている。様々な事例をあげ、貧困の子供たちの現実を話された。慈恵病院では、毎週木曜日に子ども食堂を開催している。毎回約50人の子供たちが集まり、79回目となった。子ども食堂は、ボランティアや寄付で行われているが様々な工夫をし、いつまでも子どもたちのよりどころとなるように努力していると話された。震災での医療現場の努力・工夫や表面化しない貧困や虐待の現実に熱く向き合う蓮田氏の姿勢に聴衆は感銘を受けていた。



最後に、貴学会より平成29年度公開講座助成金を賜りこの講座が成功裏に終わりましたことを心より深く感謝いたします。